

阿多由太神社

Atayuta Jinja

語り手 加藤 織衛

聞き手 山本 真紀

企画 高山市

取材日：令和6年11月4日

あ た ゆ た 阿多由太神社の歴史

全国に阿多由太という名前の神社は、うちの神社しかございません。この神社ができた年代は不詳ですが、本殿の建立年代については、以前、年輪年代測定調査で年輪を数えて調べていただいたら、室町時代の1462年ということが判明しました。平安時代の延喜元年（901年）に作成された「日本三代実録」には貞観9年（867年）に従五位下を賜ったと記載されております。そのように阿多由太神社は格式があるということです。また、飛騨国式内八座のひとつでもございます。

もともとは、本当に神社だけだったんですよ。橋なんかない離れ小島。現在の赤い橋は、巻戸橋^{まきどばし}って言うんですよ。昔は、渦を巻いていて、落ちれば唸るぐらいの激しさだったみたいです。もう神域ですよ。今でこそ橋ができて出入りができますが、当時は本当に神域で、祭りの時だけ、みんなが来たそうです。

昔から、阿多由太神社は、木曾垣内・三日町・半田^{うぶすながみ}の産土神（注1）として崇敬されてきました。年間の祭礼は10回で、祭りの前に総代さんが会議をやられます。総代さんは、1年に百何十日も活動され、大変なんですけれど、伝統を守るといって、一生懸命尽くしていただいております。

阿多由太神社との関わり

寛永9年（1632年）、熊本藩主加藤忠広が幕府から改易を命じられ、嫡子で加藤清正の孫にあたる加藤光正を高山藩主の金森重頼^{しげより}にお預けになりました。そして、光正の妹の重姫^{あつひめ}が阿多由太神社に隠れ住んでいたということが伝わっています。阿多由太神社の宮司のルーツは、重姫と一緒に高山に来た家臣の加藤宗賢^{むねまさ}が、木曾垣内で阿多由太神社の鍵取りになったことだと言われている。

私は、12代目の阿多由太神社の宮司にあたります。戸籍上では次男でございますが、兄は生まれてすぐに亡くなったので、後を継ぐことになりました。小学1年生の頃より、阿多由太神社のお祭りのお手伝いをやっています。最初の1年っていうのは何もできん。ただ座って飾りみたいなものでいました。徐々に年数を追うごとに、玉串を渡したり、神饌^{しんせん}を受け渡すお手伝いをするようになりました。

当時、父は、ここを入れて11社の神社を兼務していました。私も父についてそれらの神社の数か所に、年3回ほどお祭りのお手伝いに伺っていました。物心がつくまでは、仕方ないというか、何かわからんまま、ついていったんですけど、小学校の高学年から中学、そして高校になると、だんだん、友達と遊ぶことができないっていうのは嫌やなぁと思いながら、祭りの手伝いをしていました。



加藤 織衛
昭和43年5月3日生

プロフィール

＜学歴＞

昭和61年 3月 私立高山西高等学校卒業
平成元年 3月 京都皇典講究所京都國學院卒業

＜職歴＞

平成元年 4月 素盞男神社奉職
平成3年 2月 素盞男神社退職
平成3年 2月 阿多由太神社祓宣
平成25年 3月 阿多由太神社宮司

＜役職＞

岐阜県神道振興会副会長 平成10年～平成13年12月
飛騨神道振興会会長 平成10年1月～平成13年12月
岐阜県神社庁古城郡支部教化部長 平成24年7月～平成27年6月
岐阜県神社庁古城郡支部理事 平成27年7月～

注1：産土神とは、その土地の守護神。

神職になるまで

高校3年生になりまして就職先に神社は考えていませんでしたし、神学を学ぶことも全く考えていませんでした。とにかく勉強はしたくないし、お金が稼げれば良いと思っていましたが、父から「とにかく神主の資格だけでも取ってこい」と言われ、否応なしに高校卒業後、京都國學院へ2年間行きました。石清水八幡宮内にある寮に入り、午前中は神社実習をし、午後からは京都市内の学校で学業を学びました。

本当に今の時代にこんなことがあるのかと思うような修行や勉強をしました。入学して1週間は、作法とか祭りのやり方とか、いろんなことを学びました。禊ぎもやりました。その1週間のうちに何人か辞められる方もみえました。その後、勉強についていけなくて辞めていく人もみえました。実際、結構な人数、辞められましたね。最終的な人数は、入学した時の半分以下になりました。

だんだん卒業間近になると、この学校を出たらどうしようか、私に何ができるのかと考えるようになりました。たいていの人は、他の神社に奉職するか、自分の神社に戻ります。しかし、私は、自分の神社っていったって、神主だけでは生活できないので、副業をしなきゃいけない。やはり、神主の資格しかないから、どこかの神社に入ろうと思って、実家から一番近いところで募集があった名古屋の素盞男神社に奉職しました。

素盞男神社に奉職して2年間、そこで勉強も兼ねて勤めてまいりました。実際、素盞男神社も小さいお宮なんです。ただ街中にあるので、たくさんの参拝者がいらっしゃる。そして、結婚式場を5つ持ってましたから、毎日毎日結婚式がありました。当時、まだ神前結婚もブームでしたので、多い時で、土日の大安の日は28組くらいの結婚式がありました。2人で交替しながら結婚式をやったんですけど、朝から夕方まで結婚式ばかりです。もう何千組とやりました。

「結婚式をやり到这个神社に入ったんじゃないし、もう帰ろうかな」と父に言ったら、「まあ帰ってこいよ」ということやった。帰ってきてからは、父と一緒に神社を回って歩いたり、お祭りして歩いたり、近隣の宮司さんの神社のお手伝いをしていました。

地域とのつながり

年を重ねるごとに、小さい頃、親と一緒にについて回ったことがプラスになったと思うようになりました。というのは、今、私の小さい頃、神楽とか、雅楽とか、若者の獅子舞などをやっていた人が年をとって、神社の総代などになられている。小さい頃から一緒に祭りをやった方とお互いを知っているので、とても親しみがあります。いきなり学校から帰ってきて、宮司になったんじゃないからやりやすいです。私が総代さんに、こうしたほうがいいんじゃないですかって相談した時も、受け入れていただける。私も総代さんが、こういうふうにしてもらいたいんやけどって言われたら、理屈が通れば、じゃあしょうがないですねって言います。そういったところでも、つながりができてるんじゃないかなと、私は思っています。



神事の様子

私の息子も神職の一番下の資格を持っています。私が嫌やったなと思っていたことを、今度は息子がやっています。でも、私と違うのは、息子は初めの頃から嫌々、わかる頃になったらさらに嫌になってきて、「俺はこういうことは合わんの。俺がやると神様に申し訳ないで、神主さんを雇ってやる」って言うんですよ。それでも、大学の夏休みに研修に行って、一番下の神職の資格を取ってきたので、阿多由太神社と、私の受け持っている他の11社の神社に籍を入れさせていただきました(注2)。祭りもそれなりに奉仕してます。息子は、氏子さんと一緒に宴席で、積極的にアイコンタクトをとったり、いろんな方と話をしたりしていて、総代さんにも結構評判がいいです。そういう地域とのつながりがあることは、将来的にいいんじゃないかなと思っています。

祖霊祭と禊ぎ

9月1日の夜に祖霊祭^{みそ}を行っています。この本殿の左側に亡くなられた方をお祀り^{まつ}している祖霊舎^{それいさい}があるんですよ。亡くなって50年経った方を、その祖霊舎^{ごうし}に合祀^{ごうし}して、地元の氏神様としてお祀りしています。昔は、河原とかにある青っぽい石を氏子の方がひとつずつ川から拾ってきて、それに墨で名前を書いて、本殿横に敷き詰めたんですよ。

祖霊祭は、ぼんぼりに電気を灯して行く昔ながらの祭りです。そんなにたくさん的人是みえないんですけど、みんなでゴザに座って行います。お供え物も買ってきたものじゃなくて、総代さんが自分のところで採れたものを入れ物に入れてドンと盛って飾る。お祭りが終わったら、お神酒とそこにあるお酒で、スルメとかアラレとかで輪になって、先祖の方と一緒に飲むんです。

12月30日には、川へ入る禊ぎ^{みそぎ}があります。川に入っただ自身、家族、そして新しく来たる年が良くなるようにということで、川に入られます。皆さん禊ぎを体験されますと、1年くらい、本当に健康です。平均して10人、20人近くはみえます。女性の方も毎年1人か2人がみえます。こうやって禊ぎをするようになったのは、平成3年頃からでしょうか。もう30年くらいはやっていますね。

後継者不足

とにかく神社は後継者不足ですね。だんだん活動していた人が辞められたり、亡くなったりということで、本当に大変な状態です。今、旧吉城郡にいる神職は、28人ほどです。その中で私は若いほうです。しかし、神職の年数でいうと上から3番目。資格を取ったのが20歳ですので、資格を取ってからですともう30数年です。

誰でも神主になれるわけではないんです。例えば、神社の息子であるとか、奉仕する神社が決まっているとか、条件がある。まず、宮司と神社庁長の判子がいらいます。普通の人でも、皇學館、國學院などの学校で、一応資格は取れるんですけど、ただ、どこかの神社に籍を入れないと、神主と認められん。所属がないとだめなんですね。どこかの神社に所属して、ご縁がある人が神主にな



神事の様子

注2：神社に籍を入れるとは、神職資格のある人が神社に登録すること。

れるんです。

大きいお宮以外はみんな兼業です。私は、国府の12社と荒城神社に籍が入ってます。国府に23社あるうちの13社は私が関わってます。だから春、秋はもう祭りがびっちりですよ。土日を入れて、ずっと祭りに回っていますね。

人とのつながり ～コロナ禍以降～

神社に奉仕していて良かったと思うのは、やっぱり人とのつながりですね。いろんな方とお話をすると、神社にプラスになることもマイナスになることもあるんですけど、いろんな方とお話をして勉強させていただいています。

コロナの時はね、会話することが減り、ただ神事やって、挨拶をして終わり。横のつながりも縦のつながりもあんまりなく過ごしてきました。お祭りでは、獅子舞も^{とうけいらく}鬨鶏楽(注3)もやらず、本当に神事だけでしたね。

ようやくコロナが5類感染症になったので、「じゃあ、元のように祭りをやりましょう」といきなり言っても、もう4年ぐらい祭りをやってないんです。祭りを経験した子もない。それで、高校生になった子に、「教えてもらえんか」って総代さんが頼みに行きました。そしたら、その子は快く教えに来てくれました。

でも、いきなり例祭ではこどももかわいそうやし、じゃあ秋に練習して、まずは親御さんに見てもらえばいいってことになりました。そして、来年の例祭の時に地域の人に見ていただくこうかっていうことで、昨年の秋から練習を始めました。

練習に来ていた中学3年生の子に「ありがとな」って言ったら、「僕、本当はコロナの時から、祭りをやりたかったんです。卒業するとできんもんで、やれたで嬉しかったです」って。そういう子もやっぱりいるんです。本当に嬉しいです。

少子化 ～伝統をつなぐ～

あと問題になっていることは少子化です。どこの神社も、こどもや若い者がいないということで、獅子舞ができん状態になっています。獅子舞も鬨鶏楽も人手不足です。

もう一軒一軒回るのは無理ということで、今年から、公民館、小学校、中学校、保育園で舞うことにしました。舞う時間を決めて、皆さんに来ていただくという、今までにないことを取り入れて、無理のないようにしました。本当に、氏子さんは、みんなで盛り上げようって一生懸命やったださっています。

昔と違うのは、今のお子さん、全部が全部は祭りに参加されません。塾へ行かなくては…という、個人的なことで参加できないと、親御さんのほうでお断りされることもあります。これも時代の変化でしょうか。

こどもさんの縦のつながり、横のつながりというのは、学校ではどうなのかわかんないんですけど、神社では練習前にみんなで遊ぶんです。それで練習は、上の子が下の子に教えます。ずっと来ていると「自分もいずれは^{かね}鉦大将やるんやぞ」とか、そういうつもりでやっている。



鬨鶏楽

注3：鬨鶏楽とは、古くから飛騨に伝わる神事。鶏毛の冠などを被ったこどもたちが鉦を鳴らす。

神様のためやっていう子も、舞えてよかったという子もいれば、お礼のお金のためにやっている子もいるかもしれません。でも、やっぱり祭りでの経験は、都会ではできないものです。闘鶏楽をやるのは、飛騨だけなんですよね。他の地域にも、こども神輿とかはありますよ。でも、闘鶏楽とか、こども自身が実際に奉仕をするのは、この飛騨ならではの伝統だと思います。

女の子は舞がありますよね。ここの神社の氏子さんがだいたい230戸ほど。今は2回ほど祭りで舞えば、もう交代になるのかな。やはり、神社費を払っている以上、氏子の皆さんに平等に回さないとね。あそこの家だけ3回やったとか、思う方もみえますが、それだけやりたい人がいるってことで、ありがたいことでもあります。先月から、毎週女の子が舞の練習に来てます。上手、下手は別です。将来、そういう道に進む子なら別ですけど、祭りでは、素直な気持ちで、神様の前で舞っていただくことが一番大事やもんで、間違えても別にいいんです。

とにかく男の子であろうと女の子であろうと、祭りの思い出を作っていたたく。その上で、今度は自分が大人になった時に、自分のこどもを連れて神社に足を運んでもらえれば嬉しいです。

葬式も葬儀場でやって、隣近所の人、班の人もお手伝いはなく、お参りだけでいいというのが今の風習。でも、神社は氏子の皆さんにお手伝いをしていただかないと、祭りができないんです。神主がおるで、総代がおるで、じゃあ祭りをやろうとしたって、それはできないんですよ。結局、掃除から準備から全部、氏子さんに手をかけてもらいます。行列があれば旗持ちや神輿担ぎとか、そういったのも氏子の皆さんに協力をしていただいて、祭りをやり遂げます。

現在、老若男女、皆さんが力を合わせてできるのは、祭りだけじゃないでしょうか。地域の祭りで、こどもが親の姿を見て、それをまた子へと継いでいくことを大切にしていかなきゃいけないんじゃないかなと思います、日々努力をしています。やっぱり氏子さんの協力が大事ですので、一人でも多くの方に参加していただきたいと心から願っております。そのためには、私たち神職がしっかりしないと、と思います。



祭礼への奉仕